

稀にみる豪雨、そして稀にみる猛暑、そんな激しい幕開けで、今年の夏はどんな夏になるものやらと、あきらめの境地でじっと耐え忍ぶ毎日でした。朝方、窓をいっぱい開けると、法面のこんもり茂った林をわたり、涼しい風が吹きこんできました。いつか秋の気配が忍び寄っていたのです。

多摩市の中では有数の広い法面を抱えたわが団地です。この深い、豊かな緑はわが団地の宝ですが、夏の風景はみどり一色で変化に乏しいように見えます。いや、それは思い違いです。夏には夏の花が咲き、何の変哲もないと思える植物にも、ちいさなドラマが繰り広げられているのです。

**エンジュ** 中国原産、落葉高木、花期は7~8月



(左) 7月18日 10号棟西側の遊歩道のエンジュ。花が咲き始めた。

(中) 根元に散った花びら(7月23日)

7月下旬から8月前半にかけて、10号棟西側のエンジュの根元にうっすらと雪が積もったように花が散り敷いていたのに気付いた方も多いでしょう。仰ぎみれば枝のところがポーと白くなっているのが分かりましたが、目ではそれが限界、なんせ高木なので花の形を見るのは双眼鏡でもないと無理。ズームアップしていくと、黄白色のマメ科特有の蝶形花が見えてきます。



エンジュの花(蝶形花) (7月21日ジャブジャブ池)

満開のエンジュ(8月7日)

このエンジュは当団地と鶴牧東公園の間を通る遊歩道の中ほどに一列に植えてあります。(参考; )



**イヌエンジュ** 日本固有種、落葉高木、花期7~8月

わが団地にも以前はエンジュが10本前後あったはずですが、次第に枯れてしまって、今では北広場の滑り台の側の1本だけになってしまいました。が、よく見ると何か変です。同じ時期の7月18日の写真を見てください。花の代わりに茶色のひげのようなものが数本出ていました。拡大してよく見ると何かぼつぼつしたのが見えました。それは蕾のようでした。しばらく開花の様子を追って行くと、21日には茶色いひげがポーと白くなり、つまり開花してきました。7月31日には満開となりました。こちらもズームアップして拡大して見れば、エンジュと花の付き方は違いますが、花の形がよく似ている事が分かります。 （参考； ）



7月18日



7月21日



7月31日 満開、右は拡大写真。 （満開の日がエンジュと異なるのは、同日の撮影を逃してしまったため）

エンジュとイヌエンジュを比べて見ると、エンジュの方が開花は数日早く、花の感じが華やかで、そのためか、花が咲いている期間も少し長いような気がする。



サルスベリ (百日紅)

中国南部原産、落葉小高木(中木)、花期 7~9月



7月31日撮影

この木は中国南部原産で、江戸時代初期に渡来した花木です。6号棟前に、7月下旬から紫紅色の花を咲かせています。夏に真っ赤な花を付けるとはどこか南国風で情熱的な感じがします。本には「6弁花が枝先に円錐形にかたまって咲く」と書いてありますが、縮緬のようにしわが寄った花弁は、近寄って見てもどれが一つの花なのか、花弁の形はどうなのかよく分かりません。花期は長く7~9月と100日以上咲き続けることからヒャクジツコウ(百日紅)とも言われます。この木のもう一つの特徴は、うすくはげ落ちてすべすべしている木の肌です(写真・右)。樹皮が滑らかで猿でも滑り落ちる、というのが名の由来です。



なお、サルスベリの花は赤だけでなく、白もあります。先日、上野の東京国立博物館へ行ったら、表慶館の前に紅白のサルスベリが咲いていました。

(写真; 左)

ある本におもしろい話が載っていました。少し長くなりますが、紹介しましょう。( )

「細い枝先に、ぼってりした円錐花序を重たげに伸ばしているため、ちょっと触れても動きそうな感じ。

そんなことから、さすりの木、くすぐりの木、こちょこちょの木、こそぐりの木、笑いの木などユーモラスな俗称が各地にある」

(参考; , , )

フヨウ

中国中部原産と推定。落葉低木、花期 7～10月



8月3日撮影

主に関東地方以南で栽培され、沖縄、九州、四国などでは野生化している。この花もかなり長期間にわたって次々咲いていくが、朝咲いて夕方にはしぼむ一日花である。

わが団地ではバス停から階段を上ったところに咲いている。が、恥ずかしがり屋なのか、カメラを構える私の方を向いてくれなかった（冗談）（参考； ,HP）

アベリア（ハナゾノツクバネウツギ）



7月31日撮影

中国原産のタイワンツクバネウツギを起源とする園芸品種。日本には大正8年ころ渡来。半常緑広葉樹、低木、花期は6～10月と長い。鐘形の小さな花は羽根つきの「つく羽根」に似て、樹の形がウツギに似ていることから名付けられたようです。

わが団地にはかなりいたるところに植えられていますが、いずれも花つきが悪い。まとめて咲いていたら、通りすがりにほわっと包み込んでくるような、かすかに甘い香りがするのにも、これでは確認のしようもありません。（参考； ,HP）



**マンリョウ**

原産地；日本、台湾、中国。常緑広葉樹、小低木。花期；7～8月、  
実；11月～翌年5～6月。江戸時代から多くの園芸品種がつけられた。



8月2日 撮影

マンリョウが話題になるのは、冬に赤い実を付けてからですが、実がなるからには、いつか花も咲いているはず。私もこれまでその事に気がつきませんでした。法面を歩きながらふとマンリョウの葉の裏に何かがあるのに気付きましたが、ほとんどがもう花は終わっていました。その中で見つけたのがこのマンリョウの花です。小さな、地味な花ですが、時にはこんな花にも目を留めてあげてください。

なお、わが団地には、東法面、北法面にも多く生えています。団地の生垣の根元にも生えています。マンリョウの多いこの団地は「幸多き団地」とか。

なお、法面の草刈りを外注に出していることはご存じと思いますが、公園みたいに高木の間をきれいに刈り込んでしまうのは味気ないので、草刈り前にはマーキングして、マンリョウやその他の低木も所々残そうとしています。（参考； ）



**ヤブカラシ**

ブドウ科ヤブカラシ属 多年草 花期；6～8月

生垣ややぶ、荒地によく見られる。地下茎を長くのばし、やぶを枯らすほどに盛んに繁茂するのでこの名がある。この団地では年3回の草取りがあるので、繁茂するほどではないが、抜き忘れられたのが生垣の所々に覆いかぶさっているのが見られる。手入れの悪い、貧乏くさいところに繁茂するので貧乏蔓（ピンボウカズラ）とも言われるとか。そんなこと言われぬように、見つけたら抜き取りたいもの。しかし、ツルは引けばすぐにポキッと折れる。根もとから抜こうとしても、茎だけ折れて、根はしっかり残ってしまう。そこからまた生え出てくる、生命力の強い草だ。



ところで、この草の花は・・・写真のように小さな花の集まり（集散花序）をつける。緑の粒の一つ一つが蕾で、花は直径5mmほどの緑色の地味な花だ。この花は朝に開花し、午前中に花弁と雄しべが落ちると、花盤はしだいに淡紅色となる。花盤は蜜がたっぷりで昆虫たちの好物である。



ヤブカラシはつるを伸ばし、5枚の複葉をつけ生垣の上を覆ってくる。花は集散花序で、小さな粒粒が一つの花(右)。これを拡大したのが上の写真で、緑の小さな球がつぼみ、花は2個咲いている(8月6日11時)。花は昼前後に散り、橙の花盤となり、蜜を出す。白みがかった(薄ピンク)のものは古い花盤。

図鑑からの引用だけで説明をここで終わると、ふ～ん、そんなものかと何の印象にも残らない。ある日、永山へ出かけるのに朝9時少し前に多摩センター駅へと向かった。その少し手前、モノレール駅の近くの生垣には毎年ヤブカラシが覆いかぶさり、たくさんの集散花序を付けている所がある。(手入れしていないのだ)。通りがかりに花が咲いているかルレーベで探した。1個しか咲いていなかった。昼少し前、帰りにまたここを通りヤブカラシを見たら、すぐに5~6個花が咲いているのが見つかった。何だ、早朝に咲くのではなかったのか。その2~3日後その場所で、花の開花時間帯を調べてみた。猛暑の日だったので、間の時間は駅の日陰に避難しながら30分ごとに観察してみた。8時半；咲かず。9時半；咲かず・・・10時ようやく1個咲いた花も、その30分後には散ってしまい、その後一向に咲きだす気配がない。汗だくで、水を飲みながら頑張ったが、午後1時30分にはあきらめて帰る事にした。ところがである。ゆうゆう橋(郵便局の脇の陸橋)の下の日陰の藪のヤブカラシは、数個咲いているではないか。ぼくは頭がこんがらかってきた。疑問がふつつつ湧いてきた。



開花時間帯は何時頃から何時頃までなのか。早朝に一斉に咲き、昼頃には一斉に散ったりしおれたり、それが普通なのだが、この花はそうではないようだ。午前中の時間帯に個別に咲くのかもしれな



い。しかも、午前中ずっと咲いているのではなく、もっと短いかもしれない。(未確認)

なぜ日差しのある場所ではなく、半日陰の場所に咲いたのか。他の植物を枯らすほどに覆いかぶさるのなら日差しが好きならばではないか。それともあまりに気温が高いのはやはり苦手なのか？

花盤の蜜は昆虫の好みと書いた。僕の写真にもヤブカラシの蜜を吸う昆虫が何枚も写っている。普通なら花に群がる昆虫を撮ろうと近づこうものなら、気配を察しられてさっと逃げられてしまうのに、この昆虫たちは蜜を吸おうと夢中なのだ。特にアオスジアゲハなどは、ぼくがカメラを構えている前に、スーと降り立ち、昆虫にとっては天敵のはずの人間なんか眼中にないかのように、花に戯れ、蜜を吸って飛び去った。昆虫たちにとってヤブカラシの蜜は本当に美味なのだろう。



さて問題はここから。写真をよく見てほしい。昆虫たちは、花が散り、雄しべが落ちた後に群がっているのだ。これでは受粉にならない。花盤の蜜は昆虫に御馳走している訳ではない。植物は花を咲かせ、受粉させるために虫を誘うはず。

アリは花の側にいるので受粉の手伝いをするかもしれない。インターネットでヤブカラシに群がる昆虫の写真を見ると、花に群がる写真もあるが、花が散ってからの写真も多い。何故か？

(なお、ヤブカラシの蜜はアシナガ蜂やスズメ蜂の好物との事で、この点にご注意の事)

この答えのヒントは別の所にあるようだ。ヤブカラシは染色体が3倍体で対にならず、結実しないものが多いとの事。(2倍体で結実するものもある)。つまり、花の咲いている時に昆虫を誘い花粉を付けてもらっても無意味なのだ。花が散った後の花盤の蜜の提供だって無意味であるのは言うまでもない。まったくこの植物は、花を開き、虫を誘い、受粉させるというシステムが壊れてしまっているのだ。

(参考; , HP)

#### 〔団地周辺の植物から〕

グダグダ長文を書いてしまったので、ここらで一息。夏にさわやかな野草を紹介しよう。

わが団地は年3回の草取りしているため、雑草も少なく、生えても小さく、花も付けていないものも多い。住環境としては良好といえる。が、植物を観察する者にとっては・・・という訳で、団地周辺から季節の野草を探してみた。

**ツククサ** ツククサ科 1年草 花期；6～9月

道端や草地などによく見かける野草である。分布は日本全土、アジア全域、アメリカ東北部など世界中に広く分布しているという。そして、まさしくこの花こそ一斉に、早朝に咲き、昼頃にはしぼんでしまう。掲載の写真はビリリアの北側の階段下、旧わんにゃんのフェンスの所で、朝8時半頃に撮ったものである。



8月7日8時半撮影

正面から見てもさわやかで美しい。図鑑には、「二つ折れになった舟形の苞(ホウ)に包まれた花序」と説明されているが、横から見るとよく分かる。雄しべは6個のうち完全なものは、花柱(雌しべ)とともに長く突き出ている2個だけ。短い黄色の葯の部分は花粉を出さない仮雄しべとの事。(正面からの写真では雌しべは見えにくいですが、横からの写真で伸びているのが分かる)。

ところが、他の本には、この花の受粉には三つの形態があり、前記の他に、しぼむ時に短い雄しべとの自家受粉、そして閉鎖花までであると最近分かってきたという( )。野草とは言え侮るなかれ、なかなか複雑な機能を備えた花のようだ。

実はこのツククサ、家のカミさんが大好きな花である。ヘブンリー・ブルーの色合いが何とも言えないと言う。それでプランタンに植えた事があった。いつしか種がこぼれて、そのまま手入れもせず何年間かツククサの花を楽しんだ事がある。

(参考； , HP)

閉鎖花とは開花せず自家受粉して結実すること。タチツボスミレも時期遅れの花は閉鎖花となる。



**ヒルガオ**

ヒルガオ科 多年草 花期；6～8月

日当たりのよい野原や道端などに生える、この辺ではフェンスなどに絡まっているのがよく見られる。アサガオ同様朝に開花するが、昼になっても花がしぼまないことからこの名がある。つる性の多年草で、地上部は毎年枯れるが、春からつるが伸び始め、夏にかけて開花する。

清楚な感じの花で、この花が咲いているとほっとして、思わず立ち止まって見つめてしまうのだが、アサガオと違って観賞用に栽培されることはほとんどない。結実することはまれで、地下茎で増え、一度増えると駆除が難しいので、一般には雑草として扱われる。残念！

(参考； ， ,HP)



カヤに絡まっているので葉が分かりにくいですが、花の付け根の小さな葉（鋸形）がヒルガオの葉。(8月7日)

**(トピックス)**



**シラカシの実**

東法面で見つけたシラカシの実。まだ寸詰まりでどこか変ですが、秋になるにつれドングリになっていきます。この団地にはシラカシ、アラカシ等、カシの木が多いので探してみてください。

**セミのぬけがら**

わが団地は法面だけで500本ほどの樹があります。そのためもあるでしょう蝉が多いですね。法面を歩くと、高木の葉裏や幹に、小低木にも、草の葉などにも、いや居住区の中の樹にも、至るところに蝉の抜け殻が見られます。植物を観察する者へのごほうびです。



**タブノキのひこばえ**

樹木の切り株や根元から生えてく若木のことを「ひこばえ」といいます。いわば樹の赤ちゃんです。1年半ほど前にタブノキの大木を伐採しましたが、その切り株からちょっと赤みがさしたかわいらしい若木が生えています。 (写真右 8月2日)

**萌芽更新の後**

6月の半ばに法面北東角のツツジの萌芽更新を行いました(植栽活動紹介を参照)。その後から若い芽がすくすく伸びています。ごらんください。

(写真左 8月6日)

**【参考書】**

『身近な雑草のふしぎ』 森 昭彦著 サイエンスアイ新書

～ は先月の報告を参照ください。

(石川)